

【海外学会報告】

国際フランコフォニー学会 第 27 回世界大会 参加報告 Conseil International d'Études Francophones (CIÉF) 27^e congrès mondial, 9-16 juin 2013, île Maurice

2013 年 6 月 9 日から 16 日まで、インド洋に浮かぶ島国モーリシャス共和国のグラン・ベで国際フランコフォニー学会（CIÉF）第 27 回世界大会が開かれた。AJEQ 会員からは、小畑精和、鳥羽美鈴、廣松勲、小倉和子の 4 名が参加した。北米からもアジアからも近くはない場所だったこともあり、例年の大会よりは小規模だったとはいえ、40 カ国から 200 名以上の研究者たちが集まり、7 日間にわたって 50 以上のセッションが開催された。

モーリシャス島といえば、18 世紀、この島が「フランス島」と呼ばれていた時代にベルナルダン・ド・サンピエールによって書かれた『ポールとヴィルジニー』を思い起こす人も少なくないだろう。また 19 世紀には、パリで放蕩生活を送っていた 20 歳のボードレルが悪習を絶つために義父にインド行きを命じられたものの、彼を乗せた船が途中で嵐に遭ったため、すでにイギリス領となっていたこの島に立ち寄ったあとフランスに引き返してしまった、というエピソードも思い出される。さらに、モーリシャスはなんといっても、ノーベル賞作家ル・クレジオのゆかりの地である（彼の家系はモーリシャスに移住したブルトン人で、彼自身フランスとモーリシャスの二重国籍を有している）。島は 1968 年に独立国となるが、イギリス領だった時代もイギリス人はあまり住みつかず、今でも公用語の英語より、クレオール語やフランス語のほうが流暢な住民が多い。

27 回目にして初めて南半球で開催された今回の大会のメインテーマは、*« Karay de l'inter/transculturel : heurts et bonheurs »*。Karay とはモーリシャス・クレオール語で「鋳物の鍋」を意味し、「るつぼ」の比喩として用いられるそうだ。移民文学、フランス語圏各地域の文学・文化、女性作家、映画、紀行文学、言語学、フランス語教育など、この学会の定番メニューに加えて、今回は土地柄ル・クレジオやインターカルチュラリズムに関するセッションが散見され、モーリシャス、マダガスカル、レユニオンなどインド洋の作家や芸術家たちを交えたラウンド・テーブルなども多かった。

初日 6 月 9 日のセッション « Enseigner la Francophonie : innovations, technologie, stratégies I » (Présidente : Rose Marie KUHN, California State University Fresno)では、まず鳥羽が « Le français dans la diversité : réfléchir sur la francophonie » と題する発表を行った。日本のフランス語教育がフランス中心主義に陥っていることを指摘し、教師の側が多様性を意識してフランコフォニーを視野に入れた教育を行うべきであると主張。毎年春にアンステイチュ・フランセで開催されるフランコフォニーの祭りなども写真とともに紹介された。

続いて 12 日には、小畑が企画したセッション « L'Insularité dans la littérature » があった。韓国から参加した Jonghwa JIN によるエドワール・グリッサンに関する発表、Okkeun SHIN によるウーク・チョングについて発表、ケベックの Marc André BROUILLETTE によるケベック現代詩における島嶼性に関する発表に続き、小畑は « Imagination insulaire de la littérature québécoise » というタイトルのもと、『マリア・シャプドレーヌ』や『三十アルパン』、『東の間の幸福』などを取り上げ、英語の大海に囲まれたフランス語の小島であるケベックの文学作品において、いかに「島」の比喻が多いかを分析し、島の孤立性や閉鎖性は開放性への欲求にもつながっているのだとの主張がなされた。

さらに、14 日に Gilles DUPUIS (モンレアル大学) が議長を務めたセッション « Théorie interculturelles et transculturelles » では、韓国の Yong Ho CHOI が記号=人類学の理論を展開し、Junga SHIN がその手法でワジディ・ムアワッドの『灼熱の魂』を分析したあと、廣松が « Émile Ollivier : transmission de la mémoire et mémoire de la transmission » という題で、この作家における故郷ハイチ、亡命地モンレアル、「接点」としてのマイアミでの記憶の問題を、語ることの困難さや語り手の役割とともに考察した。つづく DUPUIS は、ハイチからケベックに移住した作家たちが中心になって 70 年～ 80 年代に出版していた雑誌 *Dérives* を取り上げ、文学の領域におけるインター／トランスカルチュラリズムの思想の発展の様子を報告した。

また、Nathalie WATTEYNE (シエルブルック大学) が企画した « Mémoire culturelle et approches comparatives » では、小倉が « Dérive et mémoire chez Dany Laferrière et Matsuo Bashô » と題して、ダニー・ラフェリエールの『穏やかな漂流の年代記』と『帰還の謎』を取り上げ、今や二部作として読むことも可能なこれらの作品に底流する「漂流」の意識を芭蕉の『奥の細道』と

比較しながら考察した。つづく François HÉBERT はウーク・チョングの *Trilogie coréenne* について論じ、WATTEYNE はジャック・ブローの作品におけるタオイズムの影響を分析した。

南半球は冬とはいえ、滞在期間中は初夏のようなさわやかさだった。サトウキビ畑が広がる島は、東京都くらいの面積しかないが、歴史的経緯もあってじつに多様な人種の人々が多様な言語と宗教・文化を維持しながら穏やかに暮らしているという印象を受けた。古くから交易の中継地だった島では、今回のメインテーマにもあるように、人々は日々インター／トランスカルチュラルリズムを実践して暮らしている。それはときに衝突 (heurts) も引き起こすが、幸福 (bonheurs) をもたらすものでもあることを経験的に知っているようだった。

2014 年はサンフランシスコで開催される。テーマは « Quêtes et conquêtes de nouveaux mondes »。近年ますます関係が密になってきた韓国ケベック学会員やケベック在住の研究者たちと共催で、またいくつかのセッションを企画したいものである。

(小畑精和・鳥羽美鈴・廣松勲・小倉和子)